

社会福祉領域からみたレクリエーション・余暇

～ホームヘルパー養成講習受講者と福祉ボランティア実践者の事例から～

山本 存（甲南女子大学）

1. はじめに（問題の所在）

近年の少子高齢社会のわが国において社会福祉の役割にかかる期待が年々強くなってきている。特に、高齢障害者に対しての要援護対策として、1988年に社会福祉士及び介護福祉士法が制定され、また、同年に高齢者保健福祉推進十か年戦略、いわゆるゴールドプランが策定された。これにより、施設福祉および在宅福祉を緊急に整備する方針が立てられた。1994年には、ゴールドプランを大幅に上回る高齢者保健福祉サービス整備の必要性が唱えられるようになりその見直しとして、さらなる充実を目指す新ゴールドプランが策定され、新たにマンパワー養成確保の項目が追加された。寮母・介護職員 20 万人、ホームヘルパー 17 万人（ゴールドプランの在宅サービスの整備の項目で 10 万人）の目標が掲げられた。しかし、新ゴールドプランを実現したとしても、特別養護老人ホーム 29 万人分は、2000年要介護者数推計（厚生労働省調べ）約 280 万人の 1 割程度にすぎない。また、17 万人のホームヘルパーは、65 歳以上人口 1000 人あたり 8.0 人で、福祉先進国といわれるデンマークの 1990 年時点の 34.9 人と比較するとその 4 分の 1 にも満たない。

多くの問題を抱えながら、2000年には介護保険制度が導入されたが、十分な介護サービスを提供できていないのではないかと指摘も多い。介護サービスが不足している状態では、要介護認定は、認定というよりも介護保険適応対象者の抑制や給付制限のために利用されかねない。それに、市町村により認定に相当なばらつきがあったことも問題である。

この制度の導入によって、ホームヘルパーの介護労働は点数化されることになった。家事援助、身体介護、複合型によって単位数が計算され、給付額とヘルパーの報酬が決まる。すべてがマニュアル優先で、地域ごと、利用者ごとによりよい介護を工夫していく余地が少なくなる現実が考えられる。この点数制のもとで、特に営利企業（介護保険指定業者）で働くヘルパーに求められるのは、心のこもった介護などではなく、できるだけ多くの要介護者をできるだけ短時間に要領よく介護する能力であるといえなくもない。ホームヘルパーも労働単価が低いために、労働過多になりやすく余裕のある介護ができていない現状も浮かび上がってきている。

こういった背景のなかで、実際のホームヘルパー養成講習受講者の状況はどのようなものであろうか。個別の対人援助業務が主となり、豊かな人間性や豊かな余暇活動経験のあるの方が望まれるはずである。そこで、レクリエーション・余暇をキーワードとして、福祉現場においてボランティア活動をされている方々と比較し検討していきたい。

2. 研究方法

兵庫県M町ボランティアの集いにおけるボランティア研修会で、レクリエーションについての考え方・基本的理解、福祉現場でのレクリエーション実践について等を概説した後集会法により質問紙調査を実施した。また、ホームヘルパー養成講座については養成カリキュラムである「レクリエーション体験指導」において、前述と同様にレクリエーションの考え方・基本的理解、レクリエーション実技体験の後、集会法により質問紙調査を実施

した。調査項目は、研修会参加の目的、余暇の考え方（5件法）・実施状況とレジャーカウンセリングにおいて余暇の現状を問うワークシート（20項目）を活用した。

調査対象は、兵庫県M町ボランティア団体（劇、音楽（民謡、カク）、朗読、紙芝居、がトヘルパー、配食サービス、手芸・クラフト、踊り等）対象のボランティアの集いにおけるボランティア研修（社会福祉協議会 2000年2月）参加者と県内開催のホームヘルパー2級養成講座参加者（2000年1月～2001年2月の7会場）である。有効回答率は、96.9%（286/296）であった。集計および分析には、パソコン汎用統計ソフトを使用し、クロス集計および平均値の差の検定を行った。

3. 結果

（1）基本的属性

ホームヘルパー養成講習受講者（以下ヘルパー群という）とボランティア研修参加者（以下ボランティア群という）の男女別・年齢別人数は、表1、表2のとおりである。

表1 ヘルパー群 性別・年齢別

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	計
男性	1	6	6	2	39	3	0	57
女性	0	12	7	15	53	4	0	91
計	1	18	13	17	92	7	0	148

表2 ボランティア群 性別・年齢別

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	計
男性	0	0	0	4	7	32	4	47
女性	0	3	1	5	30	40	12	91
計	0	3	1	9	37	72	16	138

ヘルパー群が男女とも50歳代が多い（男性68.4%、女性58.2%）のに対し、ボランティア群は50歳代（男性14.9%、女性33.0%）から60歳代（男性68.1%、女性44.0%）となりやや年齢が上がる。また、仕事をしていない人はヘルパー群男性89.5%、ボランティア群男性51.1%、ヘルパー群女性86.8%、ボランティア群75.8%であり、逆に仕事を持っている人は、それぞれ5.3%、44.7%、8.8%、23.1%であった。

（2）ヘルパー群とボランティア群

ヘルパー群とボランティア群の趣味（積極的なレクリエーション活動・余暇活動）の有無とその頻度および活動時間について見てみると、趣味の有無については、男性は両群に差異は見られないが、女性には有意差が認められ、ボランティア群の方が趣味を持つ割合が多い。趣味活動の時間には両群の差は認められないが、活動頻度は男女ともにボランティア群の方に頻度が高い傾向にあった。（表3、表4）

表3 趣味活動の頻度（男性） (* p<0.05, ** p<0.01, *** p<0.001)

	毎日	週3・4	週2・3	週1	月1・2	その他	計	カイ二乗値	自由度	p値	検定
ヘルパー群	7	4	15	15	6	4	51	22	5	0.0005	**
ボランティア群	12	29	6	6	0	0	47				
計	12	11	18	19	6	4	98				

表4 趣味活動の頻度（女性）

	毎日	週3・4	週2・3	週1	月1・2	その他	計	カイ二乗値	自由度	p値	検定
ヘルパー群	5	12	13	31	10	4	75	14	5	0.0148	*
ボランティア群	11	16	20	34	0	3	84				
計	16	28	33	65	10	7	159				

(* p<0.05, ** p<0.01, *** p<0.001)

次に研修会の目的や余暇の状況についての項目においては、男性で差が認められたものをあげると、「平日の余暇も積極的に活動する」であり、ボランティア群の方が積極的であった（表5）。また、女性では、研修会目的において「ボランティアをしたい・理解したい」、「家族のために役立てたい」、「仲間をつくりたい」、「自分を試したい」の項目にボランティア群の関心が高い。余暇の状況については、否定的回答ながらも、「暇なときに何をしたいかわからない」、「平日の余暇はテレビで過ごす」という傾向がボランティア群に高い。しかしながら、「休日の余暇はなるべく身体を動かす」、「休日の余暇はゆっくり身体を休ませる」という項目もボランティア群に高い傾向にあった（表6）。特に女性の場合、積極的に動き、積極的に休養するという余暇の活用に対する意識が高いという見方もできるのではないだろうか。

また、余暇活動の現状は、男女ともボランティア群の方が充実していることが示された。

表5 男性

	ヘルパー	ボランティア	t値	p値	検定
積極的に活動する	2.684	2.106	2.551	0.006	**
余暇生活状況	11.228	14.702	4.677	0.000	***

(* p<0.05, ** p<0.01, *** p<0.001)

表6 女性

	ヘルパー	ボランティア	t値	p値	検定
ボランティアをしたい	2.473	2.078	2.782	0.003	***
家族のため	1.183	2.100	1.765	0.040	*
仲間をつくりたい	2.374	1.764	3.903	0.0001	***
自分を試したい	2.275	1.921	2.341	0.010	**
仕事・やりがい	2.506	2.111	2.372	0.009	**
余暇を楽しんでいる	2.297	1.789	3.613	0.0002	***
わからない（過ごし方）	3.967	3.544	2.400	0.009	**
テレビで過ごす	3.703	3.256	2.558	0.006	**
身体を動かす	2.670	2.244	2.557	0.006	**
休養する	2.901	2.578	1.935	0.027	*
余暇生活状況	10.956	13.739	4.728	0.000	***

(* p<0.05, ** p<0.01, *** p<0.001)

(3) 男性と女性

ヘルパー群の男女の比較については、「余暇を楽しむ仲間がいる」において女性の方が仲間を持つ傾向が示された。その他の項目では有意な差は表れなかったが、全体に女性の方が点数が積極的な姿勢がうかがわれる。

ボランティア群においては、多くの項目について女性の方が前向きな姿勢を示すものが多く、研修会目的の、「ボランティアをしたい・理解したい」、「仲間をつくりたい」、「余暇を充実させたい」、「生涯学習をしたい」、「自分を試したい」に有意な差があり、「余暇を楽しんでいる」「余暇をともに過ごす仲間がいる」にも差が認められた。女性の食欲に自己開発を進めていこうとする姿が示されているようである。

4. まとめ

社会福祉利用者にとっては、施設利用者であれば、正規職員、パート職員、ボランティアの順でそれぞれのとのかかわりにより個々の生活の質が決まるであろう。在宅福祉利用者のそれは、デイサービスを利用するか、ホームヘルパーあるいは、地域のボランティアによる影響が強いと推測される。ことさら、ホームヘルパーへの期待は大きなものがあり、在宅福祉利用者にとっては、ある意味心のよりどころであって、レクリエーション体験の豊かさやそこから培われてきた人間性の豊かさは、援助技術以上の効果をもたらしてくれるものと考えられる。

ところが、ホームヘルパー2級は、社会福祉士、介護福祉士、保育士のように2年以上の養成期間とは違い、その講習期間も短く、社会福祉現場への適性が判断されにくい現実がある。また、前述の結果のように、将来的な福祉従事者になり得る可能性のあるホームヘルパー養成講習受講者と福祉現場にボランティアとしてかかわる方々の日常的な余暇活動の現況を比較してみると、ヘルパー群の方が総じて余暇活動の状況が低調である現実がある。福祉利用者のレクリエーション活動支援、余暇活動支援の必要性から考えると、ホームヘルパー（支援者側）に対するいわゆるレクリエーション教育、余暇教育のより一層の充実が望まれるところである。

また、ホームヘルパー養成講習受講者は、ホームヘルパーを職業の一つとしかとらえておらず、その適性についてあまり考えていないという見方も可能である。昨今の雇用条件の厳しさからフルタイム志向は3割程度と低く、男性にいたってはパートタイムでの就業は視野からはずれかかっている。むしろ、将来・現在の家族のために受講していることもできる。

ボランティア群は、男女とも余暇において積極的な活動意識は強いものがあるといえ（男性において年齢的にリタイヤ組も多く含まれると思われるが、有職率も高い）、なかでも、女性の余暇活動、レクリエーション活動の高い充実度、ボランティア活動への前向きな態度・姿勢は福祉現場へ大きく貢献しうることがあらためて確認された。